

竹内健児〔編〕

支援としての心理検査フィードバック

——事例でわかる心理検査の伝え方・活かし方[第3集]

A5判並製・金剛出版

2026年4月刊

定価4,180円(税込)

評者=遠田香織(大正大学)



タイトルを初めて目にしたとき、なんとも言えぬすがすがしさを覚えた。そう、私も編著者の竹内氏と同じように心理検査のフィードバックは支援そのものと思っているからである(もっと言えば心理検査の実施過程全体が支援そのものと思っているが、これも本書で述べられている)。それをここまでストレートに、タイトルとして打ち出していることに、潔さと同時に勇気づけられたような感じがした。

Finnの治療的アセスメントが日本に紹介されて以降、心理検査のフィードバックに関する研究や論文は後を絶たない。しかし、これほどまで明確に心理検査は支援だと言い切ったものはそうないのではないだろうか。竹内氏はこれまでも心理検査のフィードバックに関する書籍を多数執筆されているが、本書『支援としての心理検査フィードバック』というタイトルに込められているのは、心理検査の主役はあくまで受検者であり、受検者に心理検査の結果を返すことが当然として実行されるのであれば、何をどこまで、どのような形で返すのが治療的で、かつ受検者や周囲の人の支援となるかを考える必要があるという問題提起であろう。

本書は第2章から最終・第9章まで事例の提示が続く。就学前児童の巡回発達相談における事例や、発達支援センターの心理士として小学校に出向いて検査を実施した事例、さらには精神科クリニックや精神科単科病院での事例など、対象職域は幅広い。もちろん、検査内容も知能検査や投射法人格検査、描画や質問紙、神経心理学的検査などさまざまである。そのため、現場で心理検査を実施した経験がある読者であれば、自身の体験と重ねて読むことができるであろう。そして、おそらく本書の最大の魅力は、各章の事例提供者(検査者)の臨床経験や現在の職場における役割、さらには検査依頼経緯やどのような考えや思い(葛藤)のもとで報告書をまとめてフィードバックしたかが詳述されていることである。そこには「文脈」があり、検査

者の「息遣い」が感じられる。私たちがフィードバックで困るのはたいていこの「文脈」が絡んでいるときに、それを詳述している書籍はありそうでなかった。それだけでも読み応えは十分なのだが、各事例の後にはベテランの臨床家のコメントが続き、読んでいて思わず「なるほど」と唸ってしまう。

とにかく実践を文字に落とし込んでいるため、読み終えた後にどれか一つの事例を真似てみたくもなるが、竹内氏は「誰かが定式化したフィードバックの方法を忠実に再現することが大事なのではないし、忠実に従えていないことに負い目を感じる必要もない。向き合うべき相手はその特定の方法ではなく受検者なのだから、受検者に応じて創意工夫を続ければよいのである」(p.9)と言う。目の前の受検者とそれぞれが置かれている「文脈」をとにかく大切にす竹内氏の思いが込められた、まさに実践書であり心理検査の名著と呼べるものだと私は思う。